

中学校英語教科書における文学教材を考察する —アーノルド・ローベル作「お手紙」を例に—

三 枝 和 彦

(英文学)

1 はじめに

日本の英語教育においては、実用的コミュニケーション能力の養成を重視する教育方針が引き続き掲げられ、文学教材¹が教育現場から駆逐されている。²このような状況に対して、日本人の英語力と英語教育の将来を憂慮する批判の声が上げられてきた。特に英語文学を専門とする研究者からの批判的な声は、21世紀に入ってから特に大きくなっている。例えば、英語文学の研究促進を主たる目的とする日本英文学会では、全国大会においても支部大会においても、文学の研究発表と並んで、英語教育に関するシンポジウムや研究発表が組まれるのが当然のようにになっている。とりわけ関東支部では英語教育部門が立ち上げられ、研究発表やワークショップが盛んに行われている。³そこでは教材や教授法の研究と同時に、文学教材が英語教育において持つ意義と果たしうる役割を巡る議論が展開され、かつては英語教育の主要教材であった文学教材を復権させようという試みが続けられてきた。しかしながら、文学教材の置かれた状況が変化したようには見えない。英語での実用的コミュニケーション能力への社会的要求はますます強まり、文学教材は英語教科書から姿を消したままである。

そうは言うものの、それぞれの議論や実践は、文学教材を英語教育の教材に利用しようとする教員の授業力向上に貢献しているだろうから、意義のある活動に違いない。文学は言語活動の重要な一側面であり、文化や思想が表出する場である。文学を通して言語を学ぶことによって、実用的な語学力だけでなく、対象言語に関わる文化等についての教養を深めることもできる。また、適切な素材を選べば、テキストについて感想を述べたり、議論したり、文章を書いたりするための格好の教材となり、コミュニケーション能力を養成するための学習も可能である。豊富な語彙や修辭的表現によって構成される文学のテキストは、学習者の語彙力と表現力の向上に果たす役割も大きいと考えられる。しかし、作品のテキストをそのまま教材とすることは難しく、使用目的に適うように加工する必要があるし、授業の仕方にも工夫が必要だ。したがって、文学教材を英語教育に活用するための研究が盛んになったのは、歓迎すべきことである。

大学の英語教育については、このように文学教材の使用を巡って議論と実践が重ねられてきている。それでは中等教育の英語教育についてはどうだろう。大学の英語教育ほどには研

究が行われていないのではないか。日本国内の論文を検索する C i N i i で検索してみても、中等英語教育での文学教材に関する論文や著書はあまり見当たらない。これは当然とも言えるのだが、ひとつには文学を専門にする研究者が大学で英語を教えているため、自然と大学生対象の英語教育について研究するからだ。また、中等英語教育では生徒の英語力と学習指導要領の制約があるため、文学教材の使用が難しいからでもあり、更に、教科書に収録される文学教材が減少の一途をたどっているからでもあろう。しかし、中等英語教育でも多様な言語表現のひとつとして文学教材に馴染んでおくべきだ。学習指導要領にも教材のひとつに挙げられているし、現に教科書にも収録されているわけだから、中等英語教育における文学教材の研究も疎かにされてはならない。そこで本論では研究の比較的少ない、中学校英語教育における文学教材の取り扱いについて考察する。まず中学校学習指導要領における文学教材の位置づけを確認し、続いて現行の英語教科書にどのような文学教材が収録されているかを概観する。そして収録されている文学教材からひとつを取り上げ、教材としてどのように編集されているかを分析し、文学教材の扱い方について考察を試みる。

2 現行の中学校学習指導要領における文学教材の位置づけ

現行の中学校学習指導要領（平成20年1月公示）について、文学教材への言及は言語活動の内容について記した次の箇所に見出される。学習指導要領本文では「文学」という言葉は使用されていないため、ここでは「物語」という言葉の範疇に文学が含まれていると考える。

物語のあらすじや説明文の大切な部分などを正確に読み取ること。

（第9節 外国語，第2 各言語の目標及び内容等，英語，2 内容，（1）言語活動，ウ 読むこと，（ウ），『中学校学習指導要領（平成20年1月）』94）

引用に記されているように、「物語」のあらすじを正確に読み取ることが求められている。学習指導要領解説によれば、この項目は「一語一語の意味や一文一文の解釈など、内容の特定部分にのみとらわれたりすることなく、書き手の伝えようとすることを正確に読み取ること」を示しており、「例えば、物語では、どんな登場人物がいるのか、主人公は誰か、話がどのように展開していくのかなど、大まかな流れをつかみながら」読み取ることだと説明されている（『中学校学習指導要領解説 外国語編（平成20年7月）』20-21）。物語の主要登場人物や概略を把握することが優先され、細部の語彙表現や修辞技巧、登場人物の心情の理解などは後回しにされている。言い換えれば、文学作品のような物語を読む場合でも、説明的な文章や情報伝達のための文章を素早く読む場合と同じような読み方をするように求められている。物語の基本設定やあらすじを把握するのはもちろん大切だが、「一語一語の意味や

中学校英語教科書における文学教材を考察する
—アーノルド・ローベル作「お手紙」を例に—

一文一文の解釈」にこだわることに物語を読む面白さがあるとも言え、それなくしては物語を読む意義が減ってしまう。確かに「特定部分にのみとらわれ」るべきではないが、指導要領解説の記述に沿った指導では文学教材の特徴が十分に活かされないのではないか。

平成29年3月に公示された新学習指導要領（平成33年度施行）では、上記に該当する内容は次のように変更されている。

簡単な語句や文で書かれた日常的な話題に関する短い説明やエッセイ、物語などを読んで概要を把握する活動。（第9節 外国語，第2 各言語の目標及び内容等，英語，2 内容，〔思考力，判断力，表現力等〕（3）言語活動及び言語の働きに関する事項，①言語活動に関する事項，ウ 読むこと，ウ『中学校学習指導要領（平成29年3月）』134）

読む活動の目的は「概要を把握する」ことであり、これは現行の指導要領と大きな変化はない。しかし、読むテキストの種類が「短い説明やエッセイ、物語など」に増え、「簡単な語句や文で書かれた日常的な話題に関する」という修飾語句がついた。これでは教材として使用できる物語や文学作品が今まで以上に限定されてしまうだろう。また、指導要領解説を参照すると、「短い説明やエッセイ」については具体的に説明されているのに対し、「物語」には何ら説明がない（『中学校学習指導要領解説外国語編（平成29年度7月）』57）。物語がどんなものであるのかは明白で、説明は要らないということかもしれないが、教材として短い説明やエッセイほどには重視されていないとも受け取れる。新学習指導要領に準拠した教科書では、文学教材を軽視する傾向がこれまで以上に強まり、教科書への収録数もさらに減少することが予想される。

上記のように、現行学習指導要領と新学習指導要領では、「物語」の取り扱いに小さくはない変化が認められる。この変化から、「物語」や文学作品は教材としてこれまで以上に冷遇されることが予見される。新学習指導要領準拠の教科書において、これらの素材が実際どのように扱われるのか大変興味深いところであるが、それらが出版されるのは数年先である。以下、本論では現行の教科書において文学教材がどのように扱われているのかを検証していく。

3 現行の中学校英語教科書に収録されている文学教材

現行の中学校学習指導要領（平成20年1月告示）に準拠した中学校英語教科書にはどのような文学教材が収録されているだろうか。下記は6出版社から刊行されている教科書の3学年分、計18冊を調査した結果である。ここで文学教材に数えたのは、英米文学作品及びその一部、英詩、英米文学に関連する教材である。英米文学作品には児童文学も数えた。既に述

べたように、文学作品を原作のまま教材として使用することは難しいため、たいていはその retold 版か作品のごく一部が教材として使用されている。作品を題材とするユニットを1件と数え、複数の作品が同一ユニットで取り上げられている場合はまとめて1件とした。

【英米文学作品ないしはそれを基にした物語】

1 O. Henry 作品の retold 版

- ① “After Twenty Years,” *Sunshine* 3
- ② “The Green Door,” *NEW HORIZON* 3
- ③ “Jimmy Valentine,” originally “A Retrieved Reformation,” *NEW CROWN* 3
- ④ “Jimmy Valentine,” originally “A Retrieved Reformation,” *ONE WORLD* 2

2 Arnold Lobel 作品の retold 版

- ⑤ “A Lost Button,” from *Toad and Frog Are Friends*, *ONE WORLD* 1
- ⑥ “The Letter,” from *Toad and Frog Are Friends*, *COLUMBUS* 21 2
- ⑦ “The Letter,” from *Toad and Frog Are Friends*, *NEW HORIZON* 3（原作通り）

3 その他の英米文学作品（ごく一部が使用されている）

- ⑧ “Alice and Humpty Dumpty,” *NEW CROWN* 1
- ⑨ “Peter Rabbit,” *NEW CROWN* 2

英詩（Mother Goose）

- ⑩ “The House That Jack Built,” *COLUMBUS* 21 3
- ⑪ “Bow-wow, says the dog,” “Eenie, meenie, minie, mo,” “Humpty Dumpty,” *NEW CROWN* 1

英米文学作品に関連する教材（作品に言及している）

- ⑫ Gulliver’s Travel (物語の舞台を簡単に説明している。作品内で日本の地名が登場することにも言及し、横須賀の観音崎で作品にちなむ行事が催されることを紹介している), *Sunshine* 2
- ⑬ Harry Potter, Winnie-the-Pooh, The Tale of Peter Rabbit and Beatrix Potter (「イギリスの本」というユニット内で言及される), *NEW HORIZON* 1
- ⑭ Peter Pan and its author James Barrie, and Sherlock Holmes and its author Conan Doyle (イギリスでのホームステイを題材とするユニット内で言及される), *ONE WORLD* 3

中学校英語教科書における文学教材を考察する
—アーノルド・ローベル作「お手紙」を例に—

⑮ Sherlock Holmes (イギリス関連の話題を扱うユニット内で言及される), *Sunshine 1*

しばしば指摘されているとおり、英米文学作品を使用した教材の収録数は多くない。ある程度の長さを持つ文章として作品が収録されているのは、①から⑨の9件であり、英詩であるMother Gooseを入れても11件である。⑫から⑮は話題として言及されているに過ぎないので文学教材とは言い難い。教科書18冊中でこの件数なので、なるほど文学教材は敬遠されていると言えよう。ただし、上記には含めなかったが、イソップ寓話「ライオンとネズミ」(*COLUMBUS 21 1*) や、なかえよしお作の絵本『りんごをたべたいねずみくん』(*NEW CROWN 1*)、『泣いた赤おに』(*TOTAL ENGLISH 2*)、宮沢賢治の『注文の多い料理店』(*NEW HORIZON 1*)の英訳などが収録されている。また、その他の物語作品及び歴史上の偉人や現代社会で活躍する人物の伝記等は多くの教科書に収録されており、それらを含めれば文学教材は少なくないとも言える。したがって、現行の英語教科書では、文学教材が敬遠されているというよりも、英米文学作品の代わりに多種多様な物語が使用されていると言う方が正確かもしれない。この状況も興味深い論点だと思われるが、これについて議論するのは別の機会に譲ることにして、本論では英米文学作品を使用した教材について検討していきたい。

上記の調査結果が示しているように、特定の作家、O. HenryとArnold Lobelの作品が複数の教科書で取り上げられている。O. Henryの作品はかつて大学の英語教科書にもしばしば取り上げられていたが、中学校英語教科書でも人気は高く、現在でもその傾向が続いている。“A Retrieved Reformation”の主人公をタイトルにしたretold版“Jimmy Valentine”は2冊の教科書が収録している。このうちONE WORLD 2版は、物語前半はあらすじとして語られ、物語後半は語りの文章のない台詞劇に仕立てるという趣向が施されている。これはテキストの量と難易度を調節し、口頭でのコミュニケーションを再現するための翻案だと思われる。Arnold Lobelの作品も同様に複数の教科書に収録されている。原作は絵本であるため英文が平易なことと日本でも邦訳が読まれてきたことが、複数の教科書に掲載されている理由だろう。中でも“The Letter”は2冊の教科書に収録されているが、この作品と作家に注目した研究は見当たらない。⁴次節ではこの教材の分析を通して、中学校英語教科書における文学教材の取扱い方についての考察を試みる。

4 物語作品の扱いに関する分析と考察—「お手紙」—

米国の著名な絵本作家アーノルド・ローベル (Arnold Lobel 1933-87) の代表作で、性格は異なるが仲の良い二人の友人、がまくんとかえるくんの触れ合いをユーモアと温かみを込めて描いた、『ふたりはともだち』(*Toad and Frog Are Friends*, HarperCollins, 1970) と続刊3作は、日本でも三木卓の翻訳が読みつがれてきた。その一編、「お手紙」(“The Letter”

Toad and Frog Are Friends)は複数の小学校国語教科書に収録されており、⁵児童生徒にとって特になじみの深い海外の物語作品だと言える。したがって、複数の中学校英語教科書に収録されているのも不思議ではない。多くの生徒が日本語で読んだことがあると想定される物語であれば、英語の教材として使用することが容易になると考えられるからだ。*NEW HORIZON 3*と*COLUMBUS 21 2*は同じ作品“The Letter”を収録しているが、教材としての編集の仕方は大きく異なっていて、前者のテキストは原作通りだが、後者のテキストは学習者の英語力や理解力を考慮して書き直されたretold版である。ここでは、*COLUMBUS 21*版を原作や*NEW HORIZON*版と比較することによって、中学校英語教育における文学教材の取り扱い方を考察したい。

原作は10枚のイラストと470語程度の英文から構成されている。「お手紙」はよく知られた物語だと思われるが、あらすじを確認しておこう。ある日、かえるくん（Frog）ががまくん（Toad）宅を訪れると、がまくんはポーチに座って悲しそうにしている。理由を聞かれると、がまくんはいつもこの時間に郵便を待っているが、一度も配達されたことがないのでとても悲しいのだという。それを聞いてかえるくんも悲しくなる。やがてかえるくんは急いで帰宅し、がまくん宛てに一筆したため、知り合いのかたつむりに託す。かえるくんが戻るとがまくんはベッドで昼寝をしている。起き上がって郵便を待とうと促されるものの、配達された例がないのだから、今日もこないと言って取り合わない。それでも窓の外を見続けるかえるくんをいぶかり、その理由を尋ねる。かえるくんは自分が手紙を出したので今日は配達されると答え、何と書いたのか教える。がまくんはその文面に感動し、ふたりはポーチに座って郵便配達を楽しみに待つ。4日後にようやくかたつむりが到着し、がまくんは手紙を受け取り大いに喜ぶ。

*NEW HORIZON*版は中学3年生用の教科書に収録され、英文は原文通りだが、英文とそれに対応したイラストごとにセクション区切りと番号が挿入されており、物語が10場面から構成されていることが明示的になっている。学習指導要領に示された範囲を超える文法事項、具体的には関係副詞と分詞構文の箇所には下線が引かれ、これらは発展的内容であり、必要に応じて学習すべき旨が指示されている。また、語彙表現の意味が注として付されている。物語テキストに関する読解問題等のアクティビティはない。教材としての位置づけは、巻末資料として収録された「名作鑑賞」の一編であり、通常ユニットのように学習すべき教材としては提示されていない。子供向け絵本の英文とはいえ、原文通りの物語作品を読むことのできる機会なので、少ない時間数であっても授業で扱うことが望ましいが、実際は時間的制約もあり、扱いたくてもそうできない場合がほとんどではないだろうか。

他方、*COLUMBUS 21*版は中学2年生用の教科書に収録されていて、Let's Read 1に当てられ、学習指導要領と中学2年生の英語力の範囲内に収まるように書き換えられている。既に

中学校英語教科書における文学教材を考察する
—アーノルド・ローベル作「お手紙」を例に—

言及したように、関係副詞と分詞構文を使用しない英文に書き改められているほか、語彙表現もより平易にかつ現代風に変更されている。これについては具体的な分析を行う。英文の長さは100語程度削られて371語に、イラストも10枚から6枚に減らされていて、その分内容が簡略化されている。アクティビティも“Before You Read,” “While You Read,” “After You Read”として、登場人物の行動や心情等について答える質問や、物語展開の把握を問う質問などが付されている。個人で取り組む課題として作られているが、ペア・ワークやディスカッションを取り入れるなどの工夫をすれば、コミュニケーション活動も展開できる。このような編集が施されているため、授業での使用が企図されていることが分かる。

それでは、*COLUMBUS 21*版の「お手紙」を、より詳細に分析してみよう。概してretold版では、英文や物語内容の変更によって、原作の良さが損なわれているとの否定的な評価が下されることが少なくないようだ。retold版は対象とする読者の英語力や理解力を考慮して書き換えるのだから、原作と比較すれば劣るのは必然的とも言えるので、それを指摘して批判するのは建設的ではない。したがって、ここでそのような議論を展開するつもりはないが、「お手紙」を授業でどのように扱うかを考察するにあたり、この物語が教材としてどのように編集されているのか明らかにする必要がある。また、原作は子供向け絵本なので英語は平易であり、学習指導要領の制約上、関係副詞と分詞構文の箇所を異なる構文に書き換える処理は必要だが、その他の変更点は多くないのではないかと予想される。

まず第1場面の次の部分を見てみよう（便宜的に、*NEW HORIZON*版に倣い、原作で1枚のイラストとそれに対応する英文が描写する部分を1つの場面と呼び、全体を10場面に区切る。*COLUMBUS 21*版の英文もそれに準じて区切る）。がまくんがポーチに座って悲しそうにしているのを見て、かえるくんが声をかける場面である（以下、原作の英文と*COLUMBUS 21*版の英文を比較する際に、前者を原作、後者をC版と表記する）。

“What is the matter, Toad? You are looking sad.”（原作 53）

“What’s the matter, Toad? Are you sad?”（C版 50）

C版では縮約形が使用されている。原作ではここに限らず縮約形は使用されていないが、C版の会話文においては、他の箇所でも積極的に縮約形が使用されている。これは現代の口語表現を反映した書き換えだろう。教科書でも縮約形が使用されるような場面では、原作のような書き方は古風に見えるのかもしれない。また、後半の部分については、原作とC版とで大意は変わらないがニュアンスは異なる。原作では“You are looking sad”と、かえるくんががまくんの様子を見た印象を言葉にするのに留まっているのに対し、C版のかえるくんの

発言は、がまくんの様子を見て取り、そこから一步踏み込んで、“Are you sad?”とがまくんの気持ちを尋ねるものである。C版の方がかえるくんの発言の意図がより明確であり、疑問文であることから、第2場面冒頭のがまくんの応答“Yes”との対応も分かりやすいと言えるが、原作のかえるくんと比較すると、より率直な物言いの人物という印象を与える。

次に第2場面を見てみたい。原作では関係副詞と分詞構文両方が含まれるため、大幅な変更が予想される部分だ。待てど暮らせど郵便が配達されず、がまくんはとても悲しいということをかえるくんが知り、2人でポーチに座って悲しむという場面だ。

“Yes,” said Toad. “This is my sad time of day. It is the time when I wait for the mail to come. It always makes me very unhappy.” “Why is that?” asked Frog. “Because I never get any mail,” said Toad. (原作 54)

“Yes,” said Toad. “This is my sad time of the day. Every day at this time, I sit and wait for a letter. But I’m always unhappy.” “Why?” asked Frog. “Because I never get a letter,” said Toad. (C版 50)

関係副詞“when”を使用した文が、時を表す副詞句と主節で書かれている。それに加えて“wait+for+O+to不定詞”も変更されている。この教科書ではこの物語の後に不定詞の学習が行われることになっているためだろう。更に原作で“makes me very unhappy”という、動詞makeを使用したS V O C文型の構文も変更されている。これは、第9場面でも原作の“that makes a very good letter” (63) が“that’s a very good letter” (C版 54) に変更されていることから、S V O C文型を使用しないように書き換えていることが分かる。「いつも悲しくなる」というがまくんにその理由を聞かえるくんの問いかけも、原作の“Why is that?”という疑問文が、“Why?”に縮められている。

この場面の後半は、次のように大幅に変更されている。引用は上記に続く部分である。

“Not ever?” asked Frog. “No, never,” said Toad. “No one has ever sent me a letter. Every day my mailbox is empty. That is why waiting for the mail is a sad time for me.” Frog and Toad sat on the porch, feeling sad together. (原作 55)

“Not ever?” asked Frog. “No, never,” said Toad. Frog and Toad sat on the porch together. Toad was sad. Frog was sad, too. (C版 50)

中学校英語教科書における文学教材を考察する
—アーノルド・ローベル作「お手紙」を例に—

2人とも悲しい気持ちでベンチに座っている様子を、原作は分詞構文を使用した1文で描写しているのに対し、C版は単文を連ねて3文で描写しているのは、学習指導要領を意識した処理だと理解できる。これは第5場面の“Toad was in bed, taking a nap”（原作 58）がC版では“Toad was in bed. He was taking a nap”（52）となっていることについても同じことが言える。第9場面の分詞構文“They sat there, feeling happy together”（原作 63）はC版では書き換えというよりは削除されているが、この部分の処理には別の問題もあるので後述する。注目したいのはその直前の部分だ。C版では、なぜこの時間が悲しい時間なのか、がまくんが説明する部分がそっくり削除されている。原作では関係副詞“why”を使用した“That is why”という表現があることと、がまくんの説明はこの場面の先行するやりとりの中で分かる内容であることが削除された理由として考えられる。あるいは、アクティビティ“While You Read”に、「Toadが“I’m always unhappy.”と言ったのはなぜですか」（C版 50）という問があり、削除された部分がちょうどこの問いの解答にあたることから、あえて会話中の情報を拾い集めて解答させるために、がまくんの説明を削除したのかもしれない。

このように推測するのも、他にも同じ理由で書き換えられたと思しき箇所が認められるからだ。第7場面で、「今日は誰かが手紙を送ってくれるかもしれない」と励ますかえるくんに対し、がまくんが「ばかなことを言うな。これまで誰も手紙をくれたことがないのだから、今日だって誰もくれないよ」言い返す部分である。

“But, Toad,” said Frog, “someone may send you a letter today.” “Don’t be silly,” said Toad. “No one has ever sent me a letter before, and no one will send me a letter today.”
（原作 60）

“Toad,” said Frog, “Today may be your lucky day.” “Don’t be silly,” said Toad. “Today will be the same as every other day.”（C版 52）

この部分に対し、C版ではアクティビティ“While You Read”で「Frogが“Today may be your lucky day.”と言ったのはなぜだと思いますか」と「Toadが“Today will be the same as every other day.”と言ったのはなぜだと思いますか」（52）という問がある。学習者は設問箇所までの物語をよく読み、これらの問の解答を考え出すことになるが、原作のかえるくんとがまくんの言葉がそれぞれそのまま解答に相当する。したがって、アクティビティの問を作るために原作を書き換えたのだらうと推測できるのだ。C版の方は文が短く、率直な会話文になっていて、発話者の気持ちがより理解しやすくなっているようにも見える。しかしながら、これらの発言からイメージされる発話者の姿は原作のそれとはだいぶ異なっている。こ

れは第1場面について指摘したことと共通している。問を作る都合上から書き換えられたのだとすれば、むしろ原作の文章を尊重すべきではないか。retold版では語彙表現や文法事項のレベル、理解力等を考慮した書き換えが必要だが、できるだけ原作の雰囲気を残すような処置も必要だろう。

原作をいかに維持するかという観点からすれば、C版では“mailbox”の存在が削除されていることも見過ごせない。先ほど見たように、第2場面後半の大幅な変更に伴い、原作では“mailbox is empty”と言っている部分が削除されたことで、以後もC版では郵便受けが削除されており、イラスト上で郵便受けがあることを確認できるものの、文章中はまったくその存在は言及されない。（第4場面でかえるくんが書いたばかりの手紙をかたつむりに託す際も、原作は“please take this letter to Toad’s house and put it in his mail box”（57）であるところが、“please take this letter to Toad’s house”（C版 51）になっている。なるほど郵便受けは手紙が差出人から受取人の手に渡る仲介をするに過ぎず、この物語で特に重要な役割を果たしているようには見えない。したがって、この物語のあらすじを語るとすれば、郵便受けの存在に言及する必要はないだろう。そうは言っても、郵便受けが文章中で言及されるのとされないのとでは、読者が物語を読んだ際に感じたり考えたりすることに差異が生じる。また、第4場面でかたつむりが手紙を託された際に口にする“Right away”という一言もC版からは削除されている。ゆっくりとしか進めず、配達するのに実際4日を要することになるかたつむりがこのように言うことでユーモラスな効果が生じているが、それも消えてしまうのは惜しまれる。ちなみに、電子メールの普及によって従来の郵便はsnail mailと呼ばれることになったが、この物語でかたつむりが郵便を配達するのは、このことを紹介するよい機会ではないだろうか。もっとも、この物語が創作された当時はまだそのような状況ではなかったし、現在使用されている電子メールでさえ、いつ時代遅れになるとも知れない。

原作を書き換える際に、都合により物語の細部を省略されることは珍しくないが、物語に影響を与えるため、安易な省略は避けるべきだ。上述した“mailbox”や“Right away”というフレーズなど、物語の本筋に関わらない事項については容認できるかもしれないが、第9場面と第10場面における書き換えはどうだろうか。次の引用は、第9場面で手紙の文面を聞かされたがまくんがよろこび、かえるくんと2人で配達されるのを待つ部分である（下記テキスト中の“/”は、第9場面と第10場面の境を示す）。

Then Frog and Toad went out onto the front porch to wait for the mail. They sat there, feeling happy together. / Frog and Toad waited a long time. Four days later the snail got to Toad’s house and gave him the letter from Frog. Toad was very pleased to have it.（原作 63-64）

中学校英語教科書における文学教材を考察する
—アーノルド・ローベル作「お手紙」を例に—

Then Frog and Toad sat down on the front porch and waited for the letter. / Four days later, the snail got to Toad's house and delivered the letter from Frog. When Toad read it, he was very happy. (C版 54)

原作では、文面を知ったがまくんが喜び、その様子を見たかえるくんも喜び、2人でポーチに座って幸せな気持ちで手紙の到着を楽しみに待ち続け、配達を待つ間ずっと幸せな気持ちが持続し、4日後にようやく配達された手紙を実際に手にすることでまた嬉しさを感じる、という心情の流れが読み取れる。C版では、手紙の到着を待つ2人の幸せそうな姿は見えてこないのだが、その光景は第2場面で配達される当てのない郵便を2人で悲しそうに待つ光景と対比的で、物語の展開上、重要な部分である。また、結末部分の相違も小さくない。原作では配達された手紙を手にしただけで喜んでいる。配達されることを諦めていた郵便をついに手にしたこと、かえるくんが言った通りに手紙が配達されたことが喜びをもたらしているのだ。一方C版では手紙を読んで大喜びしたと書かれている。手紙には文が書かれているので、喜びを感じるのそれはそれを読んだ時だと合理的に解釈して書き換えたのかもしれない。しかしこれではかえるくんが既に知らせた文面と同じことを確認できたために喜んでいるようにも見える。このように第9、10場面の書き換えは、がまくんが感じる喜びについての解釈に与える影響が小さくない。

結末部分の大意を取れば、がまくんは手紙が配達されて喜んだ、と要約することができて、今指摘した点もまったく問題にならないかもしれない。実際のところ、graded readersとして出版されているretold版の小説や物語の多くと比較すれば、本論文で指摘しているような事項はごく些細なものに過ぎないと言える。アクティビティとして、登場人物の設定や物語展開の把握に関するものが付されており、物語の設定やあらすじ把握を読解の目標に掲げる学習指導要領の記述に沿っている。更に、コミュニケーション活動にも活用できる、十分な教材だと評価できるのかもしれない。しかし、原作の英文の難易度は、それほど手を加えなくとも中学生が読めるものなのだから、できるだけ原作の英文を維持し、生徒が作品を鑑賞する機会にすべきではないだろうか。その観点からすれば、NEW HORIZON版のように英文には一切修正を施さずに収録するのは好ましい。しかし付録的な位置づけで収録するのではなく、また、教材として授業で使用しやすいように意味の注釈だけでなくアクティビティ等も付すような編集が必要だと考えられる。そうでなければ、文学作品が原文通り収録されていても、授業で扱われる可能性は低いだろう。

5 むすび

中学校英語教育において文学教材の使用が敬遠される理由は、作品自体の英語が学習者に

にとって難しいからだけでなく、作品を材料にどのような授業を展開すべきか見当が付かなかったり、準備に多大な時間を必要としたりするためではないか。指導要領の学習範囲に準拠し、授業での使用に適したテキストを用意するだけでも相当な時間が必要であり、授業での指導法や課題等を考案するとすれば大変な作業である。教師がそういった作業を行うことができればよいが、昨今はそのような時間を捻出するのは困難である。また、コミュニケーション重視の英語教育が続いてきた中で、特に若い世代では文学作品になじみのない教師も少なくないと推察される。こうした状況であっても文学教材を使用し、言語表現活動の重要な側面である文学に触れてもらうためには、原作の趣旨や良さを維持した使いやすい教材を提供できるように教科書作成者側の工夫が必要であり、中等英語教育における文学教材の指導法についての研究が活性化されなければならない。更に、小学校5、6年生の英語が教科となり、外国語活動が3、4年生でも実施されるため、今後は初等教育における文学教材の扱いについても本格的な研究が行われる必要がある。

注

- 1 本論では、英語教育において使用される、英語で書かれた文学作品及びそのretold版、または作品を基にした教材をこのように呼ぶ。ただし、現在の大学英語教育で文学作品のテキストをそのまま教材とすることは極めて稀であろう。中等教育においては教材に使用できる英文の量やレベルが大幅に制限されるため、retold版ないしは作品を基にした教材になるのが通例である。
- 2 戦前の英語教科書では文学が主要な教材であったが、戦後、実用的コミュニケーション重視の方針が続き、年々、その傾向に拍車がかかるなかで、文学教材は教材として不適格の烙印を押され、教育現場から姿を消していった。この経緯については、江利川の研究がもっとも包括的で詳しい。また、高橋は2006年度版の中学校英語検定教科書を自ら調査し、1996年度版の教科書を調査した先行研究と照らし合わせ、1996年度版と比較して2006年度版は文学教材が激減していることを指摘している(148)。
- 3 土屋、伊澤 1.
- 4 中学校及び高校の英語教科書に収録されたO. Henry作品については、例えば田口(2015, 2016)が着目し、教科書掲載の複数のretold版と原作を比較して読むことを通して、英語教育における文学教材の意義と効果的な活用法を示そうとした研究がある。
- 5 2011年に出版された、教育出版の1年生向け、東京書籍、三省堂、学校図書、光村図書出版の2年生向け国語教科書に収録されている。(国立国会図書館国際子ども図書館)

中学校英語教科書における文学教材を考察する
—アーノルド・ローベル作「お手紙」を例に—

引用・参考文献

- Lobel, Arnold. *Frog and Toad Are Friends*. New York: HarperCollins, 1970.
- 板垣信哉他. *Sunshine 1*. 開隆堂, 2016.
- . *Sunshine 2*. 開隆堂, 2016.
- . *Sunshine 3*. 開隆堂, 2016.
- 江利川春雄. 『日本人は英語をどう学んできたか—英語教育の社会文化史』. 研究社, 2008.
- 笠島準一他. *NEW HORIZON 1*. 東京書籍, 2016.
- . *NEW HORIZON 2*. 東京書籍, 2016.
- . *NEW HORIZON 3*. 東京書籍, 2016.
- 国立国会図書館国際子ども図書館. 「『おてがみ』掲載教科書」. 『日本の子どもの文学』. Online, Internet, July 29, 2017, <http://www.kodomo.go.jp/jcl/textbooks/index.html>
- 斎藤兆史他. 「[座談会] 文学こそ最良の教材：英語の授業にどう活かすか?」. 『英語教育増刊号』 2004.10：6-14.
- 高橋和子. 「文学と言語教育—英語教育の事例を中心に—」. 『言語と文学』. 斎藤兆史編. 朝倉書店, 2009. 148-71.
- 田口誠一. 「英語教育における文学教材の意義について—O. Henryの“After Twenty Years”をめぐって—」. 『尚絅大学研究紀要 人文・社会学編』 第47号（2015）：1-14.
- . 「英語教育における文学教材— O. Henryの“A Retrieved Reformation”とそのリトルド版を中心に」. 『尚絅大学研究紀要 人文・社会学編』 第48号（2016）：71-84.
- 土屋結城, 伊澤高志. 「文学という行為と英語教育」. 『実践英文学』 第67号（2015）：1-16.
- 根岸雅史他. *NEW CROWN 1*. 三省堂, 2016.
- . *NEW CROWN 2*. 三省堂, 2016.
- . *NEW CROWN 3*. 三省堂, 2016.
- 松本茂他. *ONE WORLD 1*. 教育出版, 2016.
- . *ONE WORLD 2*. 教育出版, 2016.
- . *ONE WORLD 3*. 教育出版, 2016.
- 文部科学省. 『中学校学習指導要領（平成20年3月）』. Online, Internet, September 25, 2017, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/_icsFiles/afieldfile/2010/12/16/121504.pdf
- 文部科学省. 『中学校学習指導要領（平成27年3月）』. Online, Internet, September 25, 2017, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf
- 文部科学省. 『中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年7月）』. Online, Internet, September 25, 2017, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf
- 東後勝明他. *COLUMBUS21 1*. 光村図書, 2016.
- . *COLUMBUS21 2*. 光村図書, 2016.
- . *COLUMBUS21 3*. 光村図書, 2016.
- 矢田裕士他. *TOTAL ENGLISH 1*. 学校図書, 2016.
- . *TOTAL ENGLISH 2*. 学校図書, 2016.
- . *TOTAL ENGLISH 3*. 学校図書, 2016.

Appendix

“The Letter” (*NEW HORIZON 3* 144-47.)

- 1 Toad was sitting on his front porch. Frog came along and said, “What is the matter, Toad? You are looking sad.”
- 2 “Yes,” said Toad. “This is my sad time of day. It is the time when I wait for the mail to come. It always makes me very unhappy.” “Why is that?” asked Frog. “Because I never get any mail,” said Toad. “Not ever?” asked Frog. “No, never,” said Toad. “No one has ever sent me a letter. Every day my mailbox is empty. That is why waiting for the mail is a sad time for me.” Frog and Toad sat on the porch, feeling sad together.
- 3 Then Frog said, “I have to go home now, Toad. There is something that I must do.” Frog hurried home. He found a pencil and a piece of paper. He wrote on the paper.
- 4 He put the paper in an envelope. On the envelope he wrote “A LETTER FOR TOAD.” Frog ran out of his house. He saw a snail that he knew. “Snail,” said Frog, “please take this letter to Toad’s house and put it in his mailbox.” “Sure,” said the snail. “Right away.”
- 5 Then Frog ran back to Toad’s house. Toad was in bed, taking a nap. “Toad,” said Frog, “I think you should get up and wait for the mail some more.” “No,” said Toad, “I am tired of waiting for the mail.”
- 6 Frog looked out of the window at Toad’s mailbox. The snail was not there yet. “Toad,” said Frog, “you never know when someone may send you a letter.” “No, no,” said Toad. “I do not think anyone will ever send me a letter.”
- 7 Frog looked out of the window. The snail was not there yet. “But, Toad,” said Frog, “someone may send you a letter today.” “Don’t be silly,” said Toad. “No one has ever sent me a letter before, and no one will send me a letter today.”
- 8 Frog looked out of the window. The snail was still not there. “Frog, why do you keep looking out of the window?” asked Toad. “Because now I am waiting for the mail,” said Frog. “But there will not be any,” said Toad.
- 9 “Oh, yes there will,” said Frog, “because I have sent you a letter.” “You have?” said Toad. “What did you write in the letter?” Frog said, “I wrote ‘Dear Toad, I am glad that you are my best friend. Your best friend, Frog.’” “Oh,” said Toad, “that makes me a very good letter.” Then Frog and Toad went out onto the front porch to wait for the mail. They sat there, feeling happy together.
- 10 Frog and Toad waited a long time. Four days later the snail got to Toad’s house and gave him the letter from Frog. Toad was very pleased to have it.
(originally underlined)

“The Letter” (*COLUMBUS 21* 250-54.)

- 1 Toad was sitting on his front porch. Frog came along and said, “What’s the matter, Toad? Are you sad?”
- 2 “Yes,” said Toad. “This is my sad time of the day. Every day at this time, I sit and wait for a letter. But I’m always unhappy.” “Why?” asked Frog. “Because I never get a letter,” said Toad. “Not ever?” asked Frog. “No, never,” said Toad. Frog and Toad sat on the porch together. Toad was sad. Frog was sad, too.
- 3 Then Frog said, “I have to go home now, Toad.” When he got back home, he wrote a letter.
- 4 On the envelope he wrote “A LETTER FOR TOAD.” When Frog went out of his house, he saw a snail. “Snail,” said Frog, “Please take this letter to Toad’s house.” “Sure,” said the snail.
- 5 Then Frog ran back to Toad’s house. Toad was in bed. He was taking a nap. “Toad,” said Frog, “Let’s get up and wait for a letter.” “No,” said Toad. “I will never get a letter.”

中学校英語教科書における文学教材を考察する
—アーノルド・ローベル作「お手紙」を例に—

- 6 Frog looked out of the window. The snail was not there yet. “Toad,” said Frog, “Maybe you’ll get a letter today.” “No, no,” said Toad. “I don’t think so.”
- 7 Frog looked out of the window. The snail was not there yet. “Toad,” said Frog, “Today may be your lucky day.” “Don’t be silly,” said Toad. “Today will be the same as every other day.”
- 8 Frog looked out of the window again. The snail was still not there. “Frog, why are you looking out of the window?” asked Toad. “Because I’m waiting for a letter for you,” said Frog. “But there will never be a letter for me,” said Toad.
- 9 “Oh, today will be different,” said Frog. “I sent a letter to you.” “You sent a letter to me?” asked Toad. “What did you write in it?” Frog said, “I wrote ‘Dear Toad, I am so glad that you are my best friend. Your best friend, Frog.’” “Oh,” said Toad, “that’s a very good letter.” Then Frog and Toad sat down on the front porch and waited for the letter.
- 10 Four days later, the snail got to Toad’s house and delivered the letter from Frog. When Toad read it, he was very happy. (371)

* 実際のCOLUMBUS 21版では、上記のようなセクション分けはないが、NEW HORIZON版に準じてセクション分けした。

A Consideration on the Use of Literary Materials in English Textbooks for Junior High School: A Retold Version of Arnold Lobel's "The Letter" Is Analysed

SAIGUSA Kazuhiko

(English Literature)

Abstract

English education in Japan has placed the highest priority on cultivating practical skills in communication after World War II. While it is regarded as more and more important, literature, which used to be major source for teaching English, has been judged as useless for the purpose of communication. Since the turn of the 21st century, many researchers and educators who are experts on English literature have voiced critical opinions against this trend. They are convinced that literature should be used in teaching English because it is not only effective but also essential for English education. They have held earnest discussion over current English education and have made many studies on the use of literature as a teaching material.

While there are many studies on the use of literary materials for higher education, the amount of studies for secondary education is comparatively small. However, because literature is an important element of language, it should also be utilized for English education in secondary school. Many more studies on how to use literary materials are needed. Therefore, this study tries to contribute another consideration of literature use in the following way.

First, current curriculum guidelines for junior high school are investigated to understand how they prescribe the manner in which literary materials should be used in English education. Next, this study reveals the variety and number of literary materials which appear in current English textbooks for junior high school. Then, a retold version of "The Letter," a famous story originally written by Arnold Lobel, which is included in two text books, is analysed closely in comparison with the original text. Through the analysis, an attempt is made to consider how literary materials should be used in English education for junior high school.